

報恩講速夜法要・報恩講日中法要「報恩講に出席して」 November



今年の報恩講法要は、所謂“コロナ禍”のため、11月20,21日共に午後の日の明るい内に行なわれました。21日の山崎龍明師による法話「信心の風光 病とともに生きる」について報告します。法話のご自身が発行されている「仏教タイムス」のコラム記事-自粛も萎縮もせずコロナを「正見」-を参考に話されました。

新型コロナウイルスを徒に怖がることなく、この災禍の中でしっかり自粛し、しかし萎縮せず自らの人生と生き方、ウイルス等について学びながら日暮しをしている。ブツダが生老病死の四苦を乗り越える八つの実践すべき道=八正道を説かれたが、その道の究極は「正見」(物事の正しい洞察)で、新型コロナの病根をどこまでも「正しく見つめ正しく恐れる。しかしこれはとても難しい」(寺田寅彦)といった生活実践を心がけている。

日本における仏教の歴史を見ると、6世紀半ばに伝来(仏教公伝538年)以来、蘇我氏や聖徳太子の飛鳥時代、聖武天皇の東大寺大仏建立、国分寺建立に象徴される奈良仏教は鎮護国家だった。平安時代には摂関政治で貴族がこの世を謳歌し、心配事は“あの世”だけの貴族仏教の時代だった。平安末期になると社会構造が大きく変ると同時に、毎年のように天変地異・疫病の流行が起り大凶作や飢饉が多発し、末法思想が広まった。そして鎌倉時代にかけて仏教は庶民救済を目的とし

た民衆仏教になり、幾人もの高名なお坊様を輩出した。

法然上人は「病患を得てひとえにこれをよこぶ」と言われた。つまり病になればそこから又新しい生き方に気付かせてもらえると。

親鸞聖人は「信心の行者は、臨終の善悪にかかわらず救われる」(浄土真宗聖典御消息第十六通)と説かれた。また江戸時代の禅僧良寛は「災難に遭うときは災難に遭うことが良きことに候これまことに災難を逃るる良法にて候」(逃げかくれできないときは、現実を直視してそれをこの身に引き受けて乗り越えることしかありません)と述べた。親鸞聖人の御生涯は、承元の法難で越後に流され、5年後赦免のあと庶民と共にあり、帰洛後九十歳で示寂されるまで仏道一筋の人生だった。

大正10年に“恵信尼消息”が発見されるまでは、聖人の存在自体を疑問視する意見もあったほどで、本当に偉い人は自分のことは語らない、の通りであった。

最後に師は、今、オリンピックは政治主導と利権がらみの「虚飾の祭典」となっていて、国はその開催を目指しているが、パンデミックになっても誰も責任を取らないだろう。それがこの国の風土となってしまった。残念なことだ、と述べられました。(盛田 好一 記)



シュリハンドクの話

【周利槃特】



お釈迦様の弟子となった兄弟の話です。聡明な兄と愚鈍な弟ハンドク。兄は弟をどうにか教え込もうとしますが、ハンドクは何をやっても覚えられません。とうとうしびれを切らした兄は怒ってしまいました。弟は自分のふがいなさに泣いてしまいました。

はない」。励まされたハンドクは再び努力します。しかしやっぱりダメなのです。そこで改めて訴えました。「やっぱりだめでした」。



お釈迦様は、今度はほうきとチリ取りを与えます。そして「常に身の周りのチリを払い、アカを除かんという句を唱え続けなさい」と助言しました。

素直に実行したハンドクはついに気づくのです。「このチリとアカとは、悩み苦しむ自分の心の中に有るものである」と。

よこんでお釈迦様の所へ行き、そのことを報告しました。お釈迦様は微笑み、「誰よりも早く徹したな」とお喜びくださったのです。(『在家仏教』2010年6月号)

編集後記(壮年会だより: 令和2年12月「秋冬号」会報)

コロナ禍は第三波感染拡大が止まらず、不要不急の外出自粛、三密回避・手洗い・うがい・マスク着用のニューノーマル(新常態)生活も、やがて一年になろうとしています。今春から入月正さんご提案の「壮年会メール交流」が始まり、また後半の壮年会法座では、会員による発表(7月原山建郎さん、9月越田修二郎さん、11月光本浩昭さん、12月福島道宏さん)が加わり、新しいかたちのニューススタイル(新様式)法座が始まりました。皆さまのご投稿をお待ちしています。

壮年会だより

令和2年12月「秋冬号」 中原寺仏教壮年会だより Vol. 30



1970年代の高度経済成長期から始まって、1990年代にバブル経済が破綻するまでの間、人々は物質的な豊かさのみを追い求めてきました。しかし、戦後復興期の「貧しくとも幸せだった」日々を思い起こすとき、それは「貧しさ」のもつシンプルな力に助けられ、引き出された「たいせつなもの」であり、それはまさに「衣食足りて礼節を知る」に連なるはずのものであると思います。

今回の新型コロナウイルス禍を奇貨として、そろそろ、「必要なものを・必要なときに・必要なだけ」という21世紀の〈小欲知足〉をスタンダード(標準)に、令和の「ニューノーマル」を生きたいものです。

【住・職・閑・話】



今年も残りわずかとなってまいりました。今年一年を振り返ってみますと、やはり新型コロナウイルスの世界的な感染拡大のことを語らざるにはおれませんが、人類が流行り病の脅威にさらされるのは決して初めてのことではありません。

今から約100年前にはスペイン風邪が大流行し、世界で5億人もの人が感染したともいわれ、日本でも約40万人の人がこの病により命を落とされたそうです。

西本願寺における学問の最高位、勸学でいらっやった山本仏骨和上も、幼いころにご家族をスペイン風邪により亡くされました。父親や兄弟など5人を亡くし、母親と小学校6年生の山本少年が残されました。

しかしその母親も、病に侵されて肺炎を併発して病床についてしまいました。母を見舞いに來られた人たちが、残されていく子どもの身を案じ、涙ながらに「あんたこんな子どもを残して死んでいったらいけません」というと、母親は肺炎で息苦しうでしたが「私はたとえ死んだとしても、この子から離れてしまうわけではありません。お浄土に生まれさせていただいて、そしてお浄土からこの子の生涯を守り

続けていくのです」と明るく話されたそうです。

母親の死後、親戚の家に預けられるも中学進学は出来ず、家の手伝いをする毎日を送り、「なぜ、自分だけ学校にいけないのか、親さえ生きていたら」と、思わずにはおれないときもありましたが、母親の「お母さんがお浄土からお前を守ってやる」という言葉が励みになりました。

その後、寺に預けられることが縁となり仏教を学ばれ、もともと頭脳明晰であったこともありますが、懸命にお念仏のみ教を聞くなかに、勸学に至るまでの学者になられました。山本和上は、「父親も母親もね、ご法義を喜んでおりました。今でも、私の心の眼では、はっきりと生きております。そういう心の眼にはっきり生きているものこそが、永遠に消えることも、どこまで行っても別れることもない、真実の世界である」とおっしゃっていたそうです。

「いつどこで終わっても全く不思議ではない」いのちが、「いつでもどこでもどのようになって大丈夫だぞ」との阿弥陀さまのお慈悲に包まれ、死が永遠の別れではなく、再び出遇っていくいのちであったと知らされるのが、お念仏のみ教であり、往生というおはたらきによって真実のいのちに目覚める世界が広がっています。

新型コロナウイルスに負けない生活習慣

免疫力を高める8つのアドバイス

眠る前の準備から朝目覚めるまで、良質な睡眠をとるための8つのアドバイス

<p>1 アドバイス</p> <p>毎日同じ時間に寝る事を、心掛ける</p>	<p>2 アドバイス</p> <p>食事と飲酒は、就寝の3時間前までに終了</p>	<p>3 アドバイス</p> <p>就寝の1時間半前までに仕事、スマホをやめる</p>	<p>4 アドバイス</p> <p>入浴はぬるめのお湯に心臓の高さまでつかる</p>
<p>5 アドバイス</p> <p>血流を良くする為、お風呂上がり水分補給</p>	<p>6 アドバイス</p> <p>寝室の温度を快適に保つ。冬は18~22度が適温</p>	<p>7 アドバイス</p> <p>いびきを止める為に、右向きの体勢で寝る</p>	<p>8 アドバイス</p> <p>目覚まし時計ではなく、朝の光で起床する</p>

2020年11月号「笑顔で元気」